



新潟大学広報誌
Niigata University
Campus Magazine

新大広報

Campus Forum

オープン
キャンパス
新潟大学を**観**てみよう

NO. 149
7月号



特集-1

「教育・研究を観る—新大の国際性と地域性」

特集-2

「OBを観る—新大からはばたく先輩」

- 健康コラム ——— 「将来“両親”となる学生の皆さんへ」
- こちら就職部
- キャンパスあれこれ ——— 「新潟大学全学講義」「新潟大学黎明祭」



新潟大学を観てみよう

特集-①「教育・研究を観る—
新大の国際性と地域性」

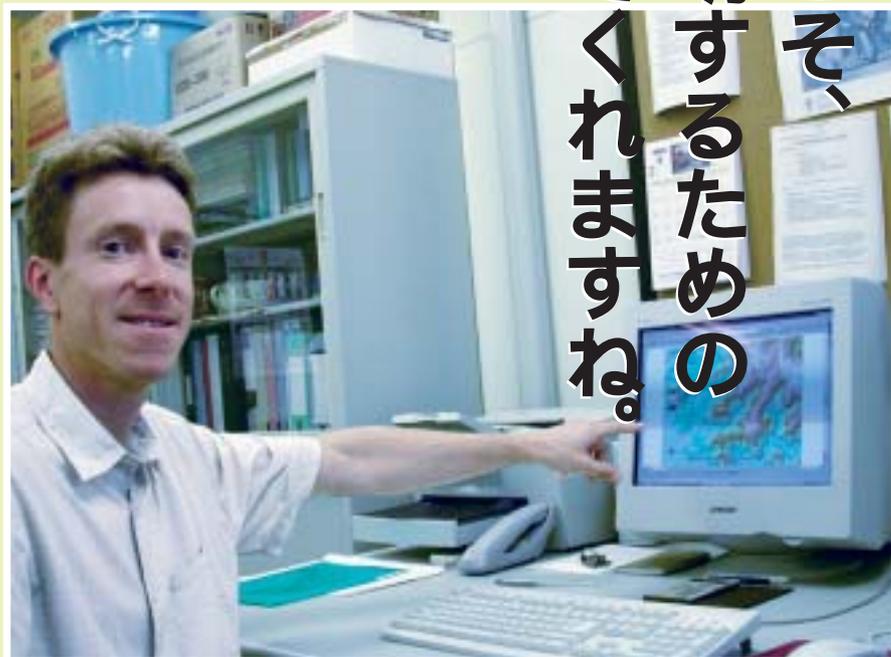


大学院自然科学研究科助手

ウイタカ・アンドリュー・チャールズ 先生

(専門分野：水文学、地形学)

世界的な豪雪地である新潟こそ、
雪にかかわる水文現象を解明するための
最適なフィールドを提供してくれませんか。



最初に、研究分野について教えてください。

Hydrology、水文（すいもん）学です。地球の水循環に関わる様々な現象を取り扱う学問です。山から流れ出す水は、水田を潤し、山麓に住む人々とあらゆる生き物が生きていくために、無くてはならないものです。私の中でも、特に、山地の森林地帯に積もった雪から融けて流れ出す水を主要な研究テーマとしています。

森林は水を蓄えると言われますが……

雨や雪として山地の森林に降った水は、直接地上に落ちるものの他に、樹木の枝葉に付着し、ぼたぼたと落下するもの、あるいは、枝から幹を伝って地上に流れ落ちるものがあります。樹木の枝葉から落ちてきた水は、直接地上に落ちてきた水とともに、森林の地表に積もった落葉や土壌に吸収され、一時的に蓄えられます。これが緑のダムとも呼ばれている森林の貯水機能です。

蓄えられた水はどのように川にでてくるのですか？

森林に蓄えられた水は、徐々に浸透し、地下水になり溪流に少しずつしみ出します。雨が降らなくても川の水が絶えない、あるいは、山に降った雨水が一気に川に流れ出ないのは、そのためです。しかし、雨が降り続くと、森の貯水能力を超えてしまい、山中に小さな流れがたくさん現れます。それらがたくさん集まり川に流れ込むのです。



ブリティッシュ・コロンビア北部沿岸山地の氷河と森林



Whitaker先生は、雪が融け出してくる現象を研究対象にしておられるということですが。

積雪は、雪ダムと呼ばれることもあります。冬の間にも積もった雪は、春になってから少しずつ融け出し、長期に渡って徐々に川に流れ出ることになります。特に、森林地帯に積もった雪は、森林の機能との相乗効果で有効な貯水機能を発揮します。

研究フィールドとしての雪国新潟は？

新潟大学に赴任する前にはポスドク（※）で、やはり積雪地のブリティッシュ・コロンビアで研究をしていましたが、世界的な豪雪地である新潟こそ、雪にかかわる水文現象を解明するための最適なフィールドを提供してくれますね。現在、朝日村の滝矢川に調査地を設定して、自然科学研究科の杉山教授と一緒に水文観測を行っています。

調査には学生も連れて行きますか？

2～3週間に1度、学生と一緒に調査地に行きます。現地では、観測データのダウンロードと、測定機器のメンテナンスなどをします。冬の積雪調査にも連れて行きますよ。

学生とのコミュニケーションは英語で？

普通はジェスチャーを交えた私の下手な

ポスドク(postdoc, postdoctoral) = 博士号取得後の(研究の)、博士課程終了後の研究者



流れてくる土砂の構成を調査
(モンタナ州の川で)

WHITAKER Andrew Charles

P r o f i l e

1970年2月生まれ。
1991年ブリストル大学地理科学科卒業（イギリス）。
1992年ニューカッスル大学大学院土木工学専攻修士課程修了（イギリス）。
1997年モンタナ大学大学院森林水文学専攻博士課程修了（アメリカ合衆国）。
1997～1999年ブリティッシュ・コロンビア大学特別研究員（カナダ）。
1999年新潟大学大学院自然科学研究科環境管理科学専攻助手。

最初に日本語で話しをすると、学生は緊張せずに、調査地や研究室でも英語を使おうとようになりますよ。

調査地で杉山教授とデータを調べる



日本語です。最初に日本語で話しをすると、学生は緊張せずに、調査地や研究室でも英語を使おうとようになりますよ。農学部では、Snow hydrologyという授業を分担していますが、これは英語でやっています。

イギリスの大学を卒業された後に、アメリカ合衆国の大学院に進学しておられますね？

イギリスのブリストル大学を卒業後、ニューカッスル大学で修士課程を修了し、アメリカ合衆国のモンタナ大学の博士課程に進学しました。学部では地理学を学び、森林の水文現象に興味を持ちました。そこで、森林水文学で著名な研究実績があるモンタナ大学に進学しました。大学院でやりたい研究ができる大学が、たまたまアメリカ合衆国の大学だったということです。

その後、ポスドクでカナダへ移られましたよね？

博士課程を修了した後は、イギリスに帰ろうと思っていたのですが、偶然カナダで研究ができることになったのです。カナダ政府の研究機関が収集した大量の水文データを使った研究でした。すごくいいデータで、それを使って森林水文のコンピュータモデルを作る仕事をしました。雪山から流

れ出す水を森林管理によって制御するための方法を検討するのに必要な基礎的研究だったのですが、そこでの研究が新潟大学に赴任するきっかけになったと思います。

ポスドクの研究を終了した後に新潟大学に赴任されたわけですね？

カナダでは、コンピュータと向き合っていたので、実際にデータを取りに行く機会は減ってしまいました。そのような時に、日本のフィールドで森林水文を研究するチャンスが得られたのです。

日本での生活は楽しんでおられますか？

ええ、もともと走ることが好きなので、自転車のロードレースやランニングを楽しんでいます。新潟のトライアスロンクラブにも入っています。トライアスロンは、日本ではポピュラーなスポーツですね。最近では、ヒルクライムレースによく出ています。草津、柵池、妙高、乗鞍、美ヶ原などのレースを楽しんでいます。



溪流に入り学生と水量をはかる



妙高でのヒルクライムレース

山岳マラソンにも参加されたと聞いていますが？

富士山での大会ですね。すごく楽しかったですよ。富士吉田から富士山頂まで距離にすれば20kmくらいですが、標高700mから3777mまで約3000mを走って登ります。記録は、3時間17分でした。しかし、普通のマラソンの方が楽ですね。河口湖マラソンには2回参加しています。記録は、3時間5分でした。

昨年、トライアスロンクラブで知り合った日本人女性と伝統的な日本式の結婚式を挙げられたそうですね？

ええ、そういう意味でもトライアスロンは私にとって大切なスポーツです（笑）。結婚式は弥彦神社でした。イギリスでは教会で式を挙げるのが普通ですので、日本なら神社か、お寺ということになりますよね。しかし、結婚式場かホテルが普通だと聞いて、とても奇妙な感じがしました。日本の



弥彦神社での結婚式

伝統的な結婚式を挙げたかったので、弥彦神社にしました。私は袴をはきました。家族がイギリスから来てくれましたが、すごく興味深かったようでした。

最後の質問になりますが、新潟大学の印象とメッセージをいただけませんか？

新潟大学は、まとまりのあるキャンパスで、親しみが持てますね。キャンパスの位置もすごく良くて、リラックスできます。海の近くですし、新潟の市街からもそんなに遠くない。勉強するにも、リラックスするにもいい環境だと思いますよ。私が、最初に赴任して驚いたことは、外国人の先生や学生が非常に少ないということです。日本では普通なのかもしれませんが、欧米の大学では様々な国籍の先生や学生と一緒に学んでいるのが普通です。そう言う意味では、日本の大学は奇妙な感じがします。逆に、新潟大学の学生には、奨学金をとって、留学してほしいですね。外の世界で、多くの経験をするのはとても大切なことです。そのためにも、外国の大学での単位が認められるような制度や留学のための奨学金を充実することも必要ですね。

新潟大学の学生には、奨学金をとって、留学してほしいですね。外の世界で、多くの経験をするのはとても大切なことです。

インタビューを終えて

インタビューとは言うものの、実は、以前からウイタカ先生とは親しくさせていただいている。缶ビールを片手に飯豊山麓の露天風呂で裸のつきあいをしたこともある。温泉が大好きで、アメリカ合衆国にいた頃も露天風呂らしきものを楽しんでいたらしい。Snow Hydrology の研究者として、露天風呂で雪景色を見ながら、調査で冷えた体とともに研究の構想を暖めておられるのかもしれない。今回のインタビューでは、丁寧なクイーンズイングリッシュの端々に、イギリス、アメリカ合衆国、カナダ、日本と研究環境が変わっても、生き方や考え方は曲げない英国紳士の強い意志が伝わってくるようだった。長期の継続データが何よりも大切な水文研究のスタイルは、走ることをこよなく愛するウイタカ先生ならではの生き方と重なりあうものがあるように感じた。インタビューのテープおこしと翻訳は大学院自然科学研究科2年の高橋佳菜子さんに手伝っていただき、翻訳後の校正は奥様のウイタカ英子さんと自然科学研究科の杉山博信教授のお手を煩わせた。記してお礼申し上げます。（農学部 紙谷智彦）

留学生が40数ヶ国から来ているというのは、
他の大学と比較しても
バラエティに富んでいると思います。



留学生センター

阿波村 稔 教授

(専門分野：国際金融論、異文化経営学)



阿波村先生が国際交流活動に携わるようになったきっかけは？

銀行員時代のパリでの文化交流が原点

私は瀬戸内で生まれ育って、大学で初めて京都へ行き、勤めで初めて東京に行きました。1972年に旧東京銀行(現東京三菱銀行)に入行し、勤めて4年目のある日、突然「フランスに行け」と言われて、まず、スイス国境に近いブザンソンという町の大学へ一年間、語学研修に行くことになりました。それが縁で、以降約25年間、東京と欧州を4往復して通算12年を海外で過ごしました。

当時フランスの大学は、今の日本の留学生センターと違って、全く留学生をケアしていませんでした。だから全部自分でやらなければならなかったんですよ。当初住んでいた寮を出ることになった時、探し歩いて一軒だけあった下宿に転がり込みました。フランスの大学の先生の未亡人の奥さん宅でした。そこに10ヶ月ほどお世話になりました。毎年クリスマスカードを欠かさず交わし、渡仏のたびに家族で訪ねて行ったりして「フランスの母と呼んでくれ」と言われ、それ以来ずっと交流が続いています。

直接的にはパリで支店長をしていたとき

の日仏の経済・文化交流が、いわゆる国際交流に関心をもったきっかけですね。

新潟にきたのは全くの偶然でして、現在のポストが公募で求められていましたので応募した次第です。ただ、海、山、温泉があって自然が多様で、魚やお米など食べ物もおいしいというのはありましたね。

留学生センターはどのような活動をしているのですか？

留学生・日本人学生・地域をつなげる

活動内容は大きく2つに分けて、日本語教育部門と生活指導部門があります。留学生が快適に、トラブルができるだけ少なく過ごせるようにして、もしトラブルが起きればちゃんとケアするといった活動です。

また、留学生と日本人学生、地域の間での交流活動も行っています。去年は山古志村へ留学生と一緒に田植えに行きました。山古志村とは5、6年前から交流がありまして、村の有志の方々から1年間棚田を貸しますから田植えをしてみませんか、という提案がありました。それならということ



AWAMURA Minoru

Profile

1948年10月生まれ。
1972年京都大学経済学部卒業。
1997年5月～1999年5月株式会社東京三菱銀行為替資金部副部長。
1999年5月～2002年3月株式会社東京三菱銀行パリ支店長。
2002年4月～新潟大学教授(留学生センター)。



留学生と日本人学生、
 地域の間での交流活動も行っています。
 去年は山古志村へ留学生と一緒に
 田植えに行きました。

で、田植えをして、稲を刈って、出来たもち米をついて、かまくらで食べるという三部作を仕立てました。それが去年の5月、9月、今年の2月のことです。

行くたびに交流会を開くのですが、村の方々の中には外国人に会うのが初めてという方もいて、留学生が日本語を話すことに驚いて感激しておられました。留学生のほうも自国の話をするために資料を用意したりして、お互いにより刺激になっていますね。

現在新潟大学には何名の留学生がいるのですか？

バラエティに富んだ留学生

約400名です。半分は中国からの留学生です。そして、韓国、マレーシア、バングラデシュなどのアジアやロシアの留学生が多いですね。日本への留学生としては馴染みの少ないイランやイラクやシリアなどの中近東からも。また、アフリカだとエジプト、セネガルをはじめ7ヶ国から来ています。40数ヶ国

から来ているというのは、他の大学と比較してもバラエティに富んでいると思います。

留学生センターの課題、展望はどのようにお考えでしょうか？

おとなしい日本人学生

せっかく機会があるのに、日本人学生と留学生との交流が盛んでないことが気がかりですね。付き合っている人は付き合っているだけけれども、ほとんどの学生は顔を合わせても挨拶を交わすこともない。非常にシャイというか、おとなしい方が多いですね。逆に地域の方は、そういうのは関係なくどんどんやりましょう、とやってくれるんですけども。日本人学生はせっかくここにいるのに交流に参加していない。それが残念です。

それぞれのできること・興味を還元できるシステムづくり

最近「フェイスネット・イン新潟」というメーリングリストを始めました。これは





INTERVIEW

阿波村 教授

留学生センター



まず、「国際的なイベントに参加したい。」あるいは「私はこういうことが出来ます。」という人に登録してもらおう。それらを仲介する形で呼びかけを行ったところ、学内ボランティアや地域で行われるイベントに留学生・日本人学生・地域の方が一緒に参加する機会が多くなりました。

最近の成果としては、留学生が他の留学生に生け花を教えたい、というのがありました。中国の人なのですが、日本の生け花をずっとやってきて、「これは素晴らしい。これを何とかして留学生に教えたい。ただどこでどうやったらいいかわからない」と。そこでネット上に「こういうことを希望している人がいます。関心のある人はいませんか。」という情報を流したんです。最初は3、4人でしたが声が上がりました。その後新聞にも取り上げられて、最終的には15人も集まり大盛況でした。他にもいくつか成功した例があります。

もしも留学したくなったら？

これから留学したい人に対しては、留学

生センターで相談にのっていますし、資料もそろえています。留学中の危機管理とかは、私の経験も踏まえて授業の中でも出来るだけ話すことにしています。

留学は自分を見つめ直すいい機会ですし、留学生は地域と大学にとっての宝です。送り出しと受け入れ、そして留学生のケアと交流をどうやってみんなで自然に行っていくかが今後の課題ですね。

インタビューを終えて

「東京三菱銀行パリ支店勤務」という経歴を持つ阿波村先生。そのような人が留学生センターにいらっしゃることにまず驚いた。ご自身が留学を経験なさっているため、留学生に対するケアの大切さを身を持って知ってらっしゃる。留学生にとっては、頼りになる存在だ。そんな阿波村先生に、私たち日本人学生は「おとなしい」と映っているらしい。そういえば私も大学入学当初、ときどきすれ違う留学生にドキドキした憶えがある。髪の色が違う。肌の色が違う。雰囲気が違う……。なんとなく話してみたいけど、やっぱり恥ずかしい。第一どうやって話しかけたらいいんだろう？考えるだけで、なかなか行動に移せなかった。でもこういう学生って、実はけっこういるのではないかと思う（希望的観測）。みんなきっかけが欲しいだけなのかもしれない。そのきっかけ作りに留学生センターが尽力していることを、このインタビューを通じて知った。「みんなの持っている力を還元できれば」という阿波村先生の言葉に非常に共感した。地域も学生も巻き込んで、新大はもっと面白くなるはずだ。私もその力になりたいと思う。

（法学部4年 村越啓子）

お金も受けじゃなくて、自分たちの理念、やりたいことを追求する組織、NPO。そういう組織を取り巻く社会を探る講義をやっています。



大学卒業後、民間の文化財コンサルタントに就職。しかし、会社が潰れて失業。地方公務員になるが、組織の歯車として自分を殺すことに疑問を感じ、脱サラして独立。まちづくりのコンサルタントをやりながら大学に入りなおす。

「お金と待遇をもらって、やったことをちゃんと社会に還元していくことを求めているわけだから、研究者というのは。その負託にちゃんと応えないとまずいだろうとは思っていますね。」と、語る澤村明助教授に、民間経験のセンスを感じながらのインタビューとなった。

経済学部経済学科

澤村 明 助教授

(専門分野：NPO論、地理学、経済政策)



自作紙芝居を使い、NPO人生の熱い
思いを学生に語りかける西田さん。

NPOのゲストスピーカーを迎え、インタラクティブな講義をされていましたが、具体的にどういった講義をされていたんですか？

あの講義は『NPO論I(※)』と題したものです。NPOについてどういう歴史があるか、どういう構造なのか、経済学的にみるとNPOとはどういうものかをテーマにしています。経済学的に見ると、資本主義の世の中なんだから、みんながお金もうけを考えていれば資源の最適配分がされるはずですが、お金もうけじゃなくて、自分たちの理念を追求する組織、NPOがなぜ存在するのかを探る、そういう講義をやっています。

講義は理論的な説明が多いので、それだけだとバランスが悪いから、実際に新潟でNPOとして活躍している人に来ていただいて、活動の実際を話していただいています。毎年2人ぐらいにゲストスピーカーをお願いしています。

NPO論、そしてまちづくり論とはそもそも何なんでしょう。

『まちづくり』というのは地域をよりよくしていこうという一連の運動であって、特に住民主体で行われるものを、おおまかに『まちづくり』といいます。そういう意味ではNPOというのはまちづくりを具体的に動かす組織という言い方もできます。ですから、まちづくりとNPOというのは根っこが一緒なんですね。それをどちらから見るか。組織形態から見るのか、運動論から見るのかで、NPO論であったりまちづくり論であったりします。

逆にいえば、行政が積極的にかかわってこなかったということなんでしょうか。

むしろ、伝統的なコミュニティの中で、住民が自らやっていたものが、次第に政府部門に吸い取られていったんです。戦後、ゆりかごから墓場までみたいな話が日本に入ってきて、特に革新自治体がそれを政策として行ってきました。それが高度成長が終わると今までどおり政府に何もかも任せていいのかということになった。特に豊かになって価値観が多様化してくると、



SAWAMURA Akira

Profile

1961年12月生まれ。
1984年九州大学工学部卒業。
1986年東京都立大学大学院工学研究科博士後期課程中退。
2001年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学。
ボランティア、NPOなどの理論的分析と、歴史遺産・文化遺産の経済性、まちづくりなど、「地域の諸問題の解決」についての調査研究を行っている。

経済学部ではマネジメントスクールという
大学院を作って、そこで地域の幹部候補の
再教育をしたいと考えています。



県庁でも市役所でもいいんだけど、そういう政府部門が行う画一的な財やサービスの供給では満足できない。そうなってくると政府はだんだん小さくなって、多様な価値観で志を同じにする人たちが集まって、まちづくりの活動が起きてくるんですね。その中核を担うのがNPOのような組織です。

注目している新潟での動きは？

今、新潟で面白いなと思っているのは、県北の村上という城下町です。村上には古い町屋が残っています。古い家だからみんなお雛様なんかの人形を持っていたんです。村上の城下町の中の商売している若手の人たちが、その雛人形を古い町屋の中で見せたらお客さんをお呼べるんじゃないかということで、ささやかに30何万円のお金を使って始めた「人形さま巡り」が大ヒットして、毎年3月の1ヶ月間、それをやると何億円という観光収入が入るといって「まちおこし」をやっている事例があります。

それは経済学的にいうと、外から企業を呼んで来て雇用を稼ごうなものじゃなくて、みずから持っているものを使って地域振興するという、専門用語で内発的発展というんですけれども、その事例として面白

いと思って注目しています。

新潟大学が、新潟市とか新潟県との関わりも必要だと思うんですけれども。

そうですね。国立大学は来年4月から独立行政法人になりますから、国の一機関というよりはNPOに近いものになっていく。民間の組織に近いものになっていく。地域に対して何か貢献できるものは貢献していかないと、新潟大学の存在価値はなんですかと問われることになると思いますね。

経済学部ではマネジメントスクールという大学院を作って、そこで地域の幹部候補の再教育をしたいと考えています。また一部の有志の教官でマネジメント学会という組織を作って、そこで独立行政法人がうま



ビデオでのNPO活動紹介も行われた。

くいくまでの間はちょっとした研修などの事業を受託することで地域貢献しようかなということも考えています。

今のところは大学院経済学研究科経営学専攻のことをマネジメントスクールと呼んでいますけれども、将来的には専門職大学院なり独立大学院としてはっきりした形にしようと思っています。いわゆるビジネススクールというものが他の大学で先行していくつかできていますが、それらはMBA^(※)を出すという、経営の専門家を出すという大学院ですね。我々の目指すマネジメントスクールというのはMBAもやるんだけど、それ以外に、公認会計士や税理士といった会計学の専門家を育てるということもやります。もう一つ特徴的なのは、パブリックマネジメントコースという名称で、政府や自治体、それからNPOやNGOの幹部候補生を育てる。いわゆる公的機関の経営とか経済を教えようというコースを明確に打ち出していることです。そこがほかのビジネススクールとはちょっと違うということです。ですから授業としても自治体経営論ですとか、公共経済学、公共事業評価、それから私のNPOとか、そういうちょっと毛色の変った授業を中心にやっています。

マネジメントスクールが発展することによって、新潟県、新潟市のまちづくり、あるいはNPOが活性化していくということにつながりますか？

つながるといいですね。そういうところの中核的な人たちが問題意識や政策立案能力を高めてくれるというところに何か役立てればな、と考えていますけれども。

新潟市の今後のまちづくりの発展に関してNPOはこれからどういう役割を担っていけばいいのでしょうか。

新潟スタイルでやっていけばいいと思い

ますが、新潟には、住民や市民の声や発意というものを受けるところが、あまりありません。新潟市じゃ受け入れられないから、じゃあNPOへもっていけるかということNPOでもどこへもっていきのかわからないという感じだと思うんですね。市のほうは今政令指定都市へ向けて合併ということに関心が向いていますから、地域ごとの、小さなコミュニティの中の問題とか改良というのはNPOが参入していく余地がある。だからNPO法人「まちづくり学校」さんなんかもだいぶ頑張っているしやるけれども、もっといろいろなNPOが登場して、もっともっと地域の中で頑張っていたらいいなと思います。

その他、澤村先生は、eラーニングにも着手。新潟駅前にできた新潟大学のサテライト教室で行っている、社会人向けの授業を、インターネットで配信しようというものだ。また、歴史遺産と経済の関係を研究するべく、各地のフィールドワークを重ねたいと考えている。



インタビューを終えて

風薫る晴れた6月3日の2限に澤村先生の授業風景をカメラに収めた。ゲストスピーカーとして、巻町でNPO法人を立ち上げた西田さんを迎えた授業は、初めて講義を聞く私たちも、思わず耳をそばだてて聞く素晴らしい内容であった。

学生とのインタラクションのある双方向型の授業。そして講義風景をビデオ撮りしており、ビデオの利用から果ては紙芝居(?)まで用いて講義を行ってくださった西田さんの軽妙な語り口に、学生のみならず私たち取材者も惹きつけられた一時間半の授業となった。

午後のインタビューで、NPO論、まちづくり論を専門とする澤村先生は、新潟県や市の活性化の取組におけるNPOとまちづくりの重要性について、熱く語ってくださった。澤村先生の言葉の端々から、地域住民の積極的参加型まちづくり運動の、さらなる発展にける熱意がインタビューを通じて伝わってきた。

とりわけ、自治体や地元企業の社会人再教育を積極的に引き受け、研究成果を社会に還元することが、新潟の経済活性化につながることで、その受け皿の一つとして大学院のマネジメントスクール化について、さらにマネジメント学会の活動について、地域活性化の視点から、なるほどと納得させられる素晴らしい説明をしていただいた。

30分の短い時間では語り尽くせない内容を、ざっくばらんに話をいただき、大変ありがとうございました。(経済学部 濱田弘潤)

現在は、司法研修所で前期修習を受けて勉強をしています。内容は1年間の実務修習に行くための準備で、具体的には講義と起案で構成されています。起案では起訴状を書いたり、弁護士や検察官、裁判官という立場で答弁書を書いたりしています。前期修習は6月までで、その後は高松に1年間修習に行くことになっています。



中学生の頃、 「弁護士っていいな」と 憧れて

僕が法曹を目指しているのは弁護士の仕事に憧れをもっていたからです。中学生の頃にアメリカのドラマで黒人差別に取り組む弁護士を見て、「ああ、弁護士っていいな」と思ったのがきっかけです。弁護士志望ですが、事務所に入って民事も刑事も幅広くこなせるようなオールラウンドな力を身につけて、自分の専門や強い分野を見つけていきたいと思っています。

本格的に司法試験の勉強に取り組んだのは大学を卒業してからです。卒業してすぐ東京に行き、予備校に通って勉強を始めました。司法試験は3回目

で合格しました。勉強のコツは、論文の場合は聞かれたことに対して素直に書いていくことです。あとは条文や定義、要件などの基本的なことはしっかり押さえておくということです。

大学時代のゼミで学んだことが今でも活かされています。事例に対する考え方など、深く掘り下げて学んだことが基礎になっています。ただ、当時はまだ勉強を本格的に始めていませんでしたので、あまり法律的な力がありませんでした。今になってみると、もっとしっかり勉強しておけばよかったと思います。また、司法試験に向けた勉強も、もっと早くからしておけばよかったと思っています。

大学時代、勉強にはあまり力を入れていなかった僕が、一番力を入れていたのはクラシックギター部の活動でした。そこで僕は指揮者をやっていました。新潟では他にやっているところもないので、東京に指揮の勉強に行ったり、演奏を聞きに行ったりしていました。部活で出会った友達とは今でも連絡を取り合っていますし、同期の友達とは毎年旅行に行っています。大学時代の友達は大切だと思います。

現在の大学生、これから入学してくる学生たちには、勉強でもサークル活動でも、何か自分が力を入れられるものを見つけて、それに一所懸命取り組んでほしい。あとは自分自身の将来のことを真剣に考えてほしい。4年生より1、2年生の方が選択肢も多くチャンスもあります。自分のやりたいことがあったら、早目の準備や勉強をして努力して行ってほしいと思います。



大西 敦

(平成10年・法学部卒業、
 14年・司法試験合格、現
 在・司法研修所にて修習中)

私は経済学部を卒業して1年後、市役所に就職しました。当初の3年間は教育委員会の保健給食課で学校保健の仕事をしていました。学校でケガをした子どもに対して給付金を支払うという仕事でしたので、経済というより法律に携わるような仕事です。

その後、高齢者福祉課に異動になりました。そこでは社会福祉施設の建設に携わっていました。施設をつくりたいという社会福祉法人に対して補助金を出すという仕事ですので、あまり住民との関わりはなかったです。ただ、扱うお金の額が非常に大きかったので、仕事の責任の重さを改めて深く考えさせられました。これだけ大きな支出が、本当に市民のためになっているのだろうか悩んだこともあります。福祉ですから望んでいる方はたくさんいるのですが、実際に望んでいるのか、支出に値する基準まで達しているのかというのが分からなかったです。

そんな時、市役所の行政課題セミナーという新潟大学の先生をお迎えした研修でがありました。関心をもって聴いたのは、公共事業の評価に関することです。直接福祉とは関わりがなかったのですが、私が抱えている疑問に何か答えが見出せるような気がしました。それが大学院に行きたいと思ったきっかけになりました。それに、自分業務に関する提言をまわりに伝え

るのに、自分の知識がないと説得させることは難しい考え、大学院に行くことを決めました。

学生時代は勉強していましたが、興味があったものに関しては一所懸命やりました。その一番が地方財政論でした。ただ、大学に入学した時と、卒業する時では興味のあることが全然違いました。入学した時は金融関係に興味があったのですが、勉強しているうちに会計や経営などに興味をもち始めました。そして、学生生活が進んでいくなかで地方財政論という科目に出会い、公務員という将来へ選択肢が広がり、市役所に入るきっかけになったのかもしれない。

最後に、私の経験をもとに新潟大学のみなさんにアドバイスをしたいと思っています。大学に入ってしまうと安心して最初は遊んでしまうと思うのですが、卒業してから大きく後悔するということが多々あります。何かしら興



伊神 竜一

(平成7年・経済学部卒業、現在・新潟市役所人事課勤務、大学院経済学研究科2年在籍)

その時々に関心のあるものを一所懸命学ぶ

味があってその大学、その学部を選んだのですから、後悔しないように時間を上手に使って学んでいただきたいと思います。また、4年間学んでいく上で徐々に興味というのは変わっていくものだと思います。その時に興味のあるものを一所懸命学んでいくという姿勢をもってほしいと思います。





現 在、東芝デジタルメディアネットワーク社で携帯電話向けのアンテナの研究開発をしています。携帯電話は、より小型化が進んでいますが、そのような中でも性能の高いアンテナの開発に取り組んでいます。東芝デジタルメディアネットワーク社を就職先として選んだ理由は、学生時代に電波を使った研究をしていたということもあって、無線通信に興味をもっていたからです。ノート型パソコンやモバイルAV機器、携帯電話もその中に含まれるのですが、そのような無線通信を利用した商品開発等に非常に力を入れていたので、自分自身のスキルアップがはかれるだろうと考えて志望しました。仕事は学生時代の研究と

いですし、良い環境であると思います。

ま た、研究などを通して感じたことですが、世界でも最先端の研究に取り組んでおられる先生方も多くですし、研究設備なども充実しているところで学ぶことができるのは、研究に興味がある人にとっては、モチベーションを高めることができると思います。

就 職を控えた学部生、大学院生へのアドバイスですが、会社を選ぶにあたって、どういう会社生活を送りたいのかということを考えるのは重要なことだと思います。それは、職場環境と自分の将来像に関わってくると思いますが、自分の希望する会社で、実際に自分の将来像が描けるのかどうかということの見極めが大切だと思います。難しいですが、そういうことを考えて選べると、会社に入ってから自分のもっているものと会社のギャップが少なくすむと思っています。

大学としての場が開かれていて 過ごしやすい環境

全く同じではないですが、分野としては近いものだと思っています。

学 生時代の思い出で印象に残っていることは、大学院の時に国際会議を通して世界の最先端の研究を行っている方々に会えたことです。論文等でよく見かけていたNASAの方々や海外の先生などの発表を聞いたことは、人生経験としてとても大きかったと感じています。

これから新潟大学を受験しようという高校生に対するアピール

としては、総合大学なので講義やサークル活動などを通して文系、理系を含めているいろいろな人たちと交流をはかれるのが良いところです。大学としての場が開かれているという意味で非常に過ごしやす



佐藤 晃一

（平成12年・工学部卒業、14年・大学院自然科学研究科修了、現在・東芝デジタルメディアネットワーク社勤務）



部署の人達と

現在、国土交通省信濃川下流河川事務所調査設計課に勤務しています。信濃川下流河川事務所は、大河津分水から信濃川下流域の河川事業と海岸事業全般を扱っています。その中で、私は調査設計課調査係に所属しています。河川の流量や洪水に関する流量を調査する重要な仕事です。それと、いろいろな広報関係を担当しています。入省してから今まで、荒川と信濃川の砂防・河川事務所に勤務しましたが、川は川によって特性があって面白いと感じています。

自分が将来どんなふうに住んでいきたいのかということ意識して考え出したのは、研究室に入って3年目の頃でした。公務員試験対策を始めたのは1年弱前くらいからで、対策問題集はコツコツとやっていました。専門の分野もありましたが、私は林学だったので専門の問題集ではなくて、講義内容のノートを見たり、使った本や教科書などで勉強していました。
学生の時に学んだことを活かせるような仕事をしたいと思って今の職に就きました。専門的なことが応用編のように出てくるのですが、基礎的なことは大学時代に学んだことが出てきます。今、学生時代を振り返ってみて、もっと勉強しておけば良かったというのが正直な気持ちです。

自分の経験から後輩たちにアドバイスです。勉強も大切なのですが、就職すると人との関係ややり取りが何より重要になってきます。学生の時でも、ただ言わ



れたことをやるだけではなく、挨拶や先生とのやり取りなども大切です。アルバイトなどを通して、人との対応や関係づくりをきちんとできるように心がけて生活していると、社会に出て通じるようになると思います。また、与えられた仕事をその通りにこなすのではなく、最善の形に持っていけるように、普段から色々な角度で物事を見るのも大切だと思います。知識と経験を積み重ねていくことで、たくさんの選択肢からベストなものを選べるようになると思います。

また、就職するとやれる範囲というものが限られてきますので、縛られることの少ない大学時代にやりたいことを見つけて、いろいろ挑戦してみるといいと思います。自分がやってみて、そこからもっと突き詰めたいことがあれば、自分の道として進んでいけばいいと思います。学生は時間もいっぱいあるでしょうし、やれることはやって、将来自分がやりたいことを見つけて下さい。

勉強も大切だけど、 人との関係づくりが より重要



梅田 ハルミ

(平成9年・農学部卒業、現在・国土交通省信濃川下流河川事務所調査設計課勤務)



総合学習で中学生を指導することもある

将来「両親」となる学生の皆さんへ

保健管理センター 講師
七里 佳代

新潟大学の学生の皆さん、キャンパス・ライフは大いにエンジョイできていますでしょうか。学生生活はもとより、友人・先輩・後輩との活動や、先生・家族との関係は順調に運んでいますか？……大方の皆さんにとっては毎日が有意義に進行していることと拝察致します。私が新潟大学保健管理センターで精神保健面の相談を担当するようになってから、3年間が経過しましたが、相談に来られる学生の皆さんと接していて、一つ気付いたことがあります。

それは、相談内容は個々に別々のテーマではあっても、相談に来られるご本人の背景にご両親との関係がしっかりとしていない方が多い傾向が見受けられることです。その原因の一端として、私は以下のことを考えています。

「科学の知」が重視され続けてきた現代社会においては、何事も **対象化** して、測定可能なものに価値を認めてきました。親子関係とてもその例外ではなく、親は子を対象化し、良い子に育てるための事を一生懸命にやっています。例えば小学生の時は体を鍛えるためにスイミングスクールに送り迎えするとか、中学校になれば進学競争を勝ち抜くために学習塾に通わせて高額な月謝を払い、遅い帰宅時間に合わせて自家車で送迎するとかです。そして、子どもや親の価値は偏差値という目に見えて評価される尺度によって測定されるという具合です。そのために両親は子どもの幸せを願う一心で懸命に働き、これも目に見える数字であらわされるお金をせっせとためます。また、子どもが欲しがる物を与えるにはお金が必要なのです。

そうした事や物にふんだんに囲まれて子どもは一見幸福そうにすごすのですが、ここには「**関係性の喪失**」という病巣が忍び込む可能性が高いと考えられます。関係性とはつまり一緒に居るだけで楽しいということ。小さい子どもの頃、家に帰ってただお母さんの顔を見ただけでほっとしたり、日曜日にお父さんが家に居てただ一緒に時間をすごしてただで楽しかったりした思い出がきっと皆さんにもあるでしょう。そういう**人と人とのつながり**をわか

りと感じ取れないまま受験戦争だけを勝ち抜いてきても、どうも心の中にはどこかに虚しさが残るものであるようなのです。自分の人生をしっかりと生きてゆこうとする時、自分は誰かと存在としてつながっているという確信が必要であるようなのです。そこでは物事も力をもち得ません。自分に何かあった時にお父さんは、お母さんは、何をおしても駆けつけてくれるという絆を感じられていることが大切なのです。この感覚は成人するに従って家族以外の人との関係性にも大きな影響を及ぼす基盤となるものです。大好きな恋人とはどんな豪華なお食事をするかなどということより、とにかくただ一緒に居るだけで幸せな気持ちになるでしょう。

そこで、将来「両親」となる可能性の高い皆さんには、是非、親子の「関係性」を考慮に入れた子育てをして欲しいと切に望むものであります。保健管理センターに精神保健面での相談に見える学生の皆さんの中には、実は自分自身が他者とのしっかりした関係性を信じるにつまずいた方がいらっしやると感じるので、ですから逆を言えばここをクリアできれば立派な「両親」となれるというわけなのです。

どうかこれからの21世紀の日本で「両親」となるであろう新潟大学の学生の皆さんには、**欲求不満耐性**、**不安耐性**の備わった安定した精神生活をめざしていただきたいと心から願っております。

保健管理センター【五十嵐地区】

Tel.025-262-6243 Fax.025-262-7517

旭町分室【旭町地区】

Tel.025-227-2040 Fax.025-227-0748

利用時間 / 8:30 ~ 17:00(土・日曜、休日は除く)

こちら就職部

就職相談事務室から

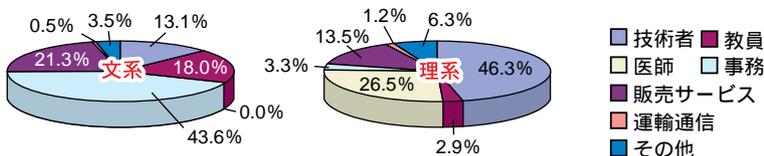
近年の厳しい雇用情勢のなか、平成14年度も一般企業での採用方針として「少数精鋭主義」がうかがえました。女子学生の就職難の情報に対してその女子学生が、真剣に就職活動に取り組んでいました。

就職相談事務室が、総合教育研究棟の2階から1階に移転しました。1、2年生の方も、就職活動を目前にしている3年生の方も、一度就職相談事務室へ寄ってみてください。きっと就職活動の参考になるとと思います。

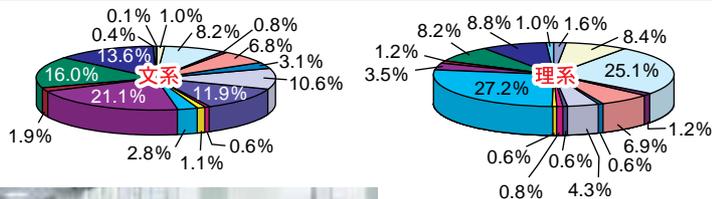
平成14年度就職関係データについて

職業別就職状況（学部）

	技術者	教員	医師	事務	販売サービス	運輸通信	その他	合計
文系	104	143	0	347	169	4	28	795
理系	227	14	130	16	66	6	31	490



	農林漁業	鉱業	建設業	製造業	電気ガス水道	情報通信	運輸業	卸売小売	金融保険	不動産業	飲食店、宿泊業	医療、福祉	支援業、学習	教育、学習	複合サー	サービス業	公務員	その他	合計
文系	0	1	8	65	6	54	25	84	95	5	9	22	168	15	127	108	3	795	
理系	8	0	41	123	6	34	3	21	3	4	3	133	17	6	40	43	5	490	



- 農林漁業 ■ 鉱業 □ 建設業
- 製造業 ■ 電気ガス水道
- 情報通信 ■ 運輸業 □ 卸売小売
- 金融保険 ■ 不動産業
- 飲食店、宿泊業 ■ 医療、福祉
- 教育、学習支援業
- 複合サービス業
- サービス業 ■ 公務員 ■ その他

就職関係メールの配信について

就職部では、学生みなさんに、就職関係情報（求人情報、ガイダンス日程、会社説明会日程等）を総合情報処理センターから学生向けに配信されているメールアドレスに配信しています。

インターネットや求人票では、掲載されない重要な情報ばかりですので、必ず目を通してください。

学生用電子メールの利用法

総合情報処理センターから配信される電子メールアドレスを学生全員が利用できるようになっています。パソコンのある場所なら、どこでも利用が可能です。

1. 総合情報処理センターのHP (<http://www.cc.niigata-u.ac.jp/>) を開く
2. [学生向けサービス] をクリック
3. ユーザー認証。ユーザー名とパスワードを入力してください。（学務事務システムと共通のアカウントです。）

進路が決定した4年生のみなさんへのお願い

平成16年3月卒業予定のみなさんは、卒業後の進路が決定次第、進路内定届を所属する学部の学務係へ提出してください。就職先が内定した時、また大学院、専門学校への進学が決定した時のほか、その他の道に進む場合でも提出は必要です。

みなさんから、提出された内定届は文部科学省や厚生労働省を始めとする各種調査に対する報告の基礎データとなるばかりでなく、就職活動体験記も含めて提出していただくことによって、後輩の就職指導の参考等になるため、本学として正確に把握しておくためのものです。

就職部就職相談事務室

TEL : 025-262-6531, 6087 FAX : 025-262-7516

E-mail : shushokuk@adm.niigata-u.ac.jp

利用時間 9:00~17:00 (土日、休日は除く)

「宇宙からの贈りもの」

日本科学未来館館長/NASDA宇宙飛行士 毛利 衛 氏

平成15年6月14日(土)新潟市民プラザホールにおいて、工学部創立80周年記念講演会・全学講義として毛利衛氏による講演が行われました。全部局から500人以上の参加者があり大盛況でした。映像を使つての講演でしたが、以下にその内容を要約します。

私は、宇宙に二回行くチャンスがありました。一回目は科学者として、地上ではできない新しい材料や医薬品を作ることが目的でした。位相差顕微鏡を覗いて細胞の写真をとっていたとき、目が見つかったので、窓から地球をみました。そのとき、今見ていた顕微鏡の細胞と窓に映った地球表面の形が似ていたのです。ものごとはスケールが違っても、相対的なものではないか、と思いました。すべてのものは大きさを越えた共通点があるのではないかと思ったのです。

二回目は陸地の立体地形図を作るためのデータ集めが目的でした。毎日地球を見る仕事でした。スペースシャトルは約90分で地球を一周します。たった90分の間に、地上の24時間の生活を(直接は見ませんが)見る訳です。このようにみると、時間というのは相対的なものではないか、と思います。空間も時間も相対的なもの、と考えるときにきているのではないのでしょうか。

誰もが宇宙から見る地球は美しいと言います。それは、自分がそこから来たという思いがあるからですが、それだけではなくもっと深い意味があります。そのキーワードは生命です。生命には、環境に挑戦し順応し発展させる能力があるのです。



田中さんや小柴さんのノーベル賞を私たちはうれしいと思います。松井やイチロー、高橋尚子や中田選手が活躍すると、また小池先生が美しい歌を詠むとうれしいと思います。それは、生命が更に繁栄できる能力を獲得している、ということを感じるからです。ある個人が一つの限界を超える能力を得ると、別の者がそれに続き、こうして社会の能力が上がります。そういう生命の基本がわかれば、自分の成長の面白さを覚え、いろんな目標が実現します。大学生は、今のうちに自分の能力を知り、その意味を考えながら今の勉強をして欲しいと思います。

地球上には様々な生物がありますが、地球以外は生命が存在できない空間です。地上では様々な生物・人間が能力を発揮して、ぎりぎりのところを通り抜けて生き延びてきました。科学技術も一つの能力ですが、一歩間違えると人間は生き延びられなくなります。人間はぎりぎりのバランスをどう舵取っていくか。そのとき大切なのは、工学だけではなく、それ以外の分野、文化・芸術・スポーツなどすべての分野を豊かにすること、それが今問われていることだと思います。

(文責：工学部機能材料工学科 教授 小林敏志)

今回は、歌人 小池 光 氏の「科学のことば 詩のことば」の予定です。



6月7日、8日の二日間にわたって
黎明祭が行なわれました。



黎明祭

R E I M E I - S A I





黎明祭

REI MEI - SAI





私の中の黎明祭

黎明祭実行委員長
経済学部3年 連川辰徳

今年度の黎明祭は6月7日、8日の二日間にわたって行なわれました。今年度の企画はステージ、模擬店、スポーツ大会の三つでした。

まず、ステージですが、一日目はミュージックフェスティバル、ダンス、ピアノ演奏が行なわれました。個人的にはピアノ演奏が大変すばらしかったと思います。ちょうど夕暮れ時だったので、ピアノの音色とシチュエーションがぴったり合っていました。そして、大学周辺に舞うあの綿(?)みたいなものによって一食前広場は幻想的な雰囲気にもまれていたと思います。

二日目はゲストライブとダンスが行なわれました。今年のゲストはスクービードゥーでした。ライブも盛り上がりましたし、二日目もステージは大盛況だったと思います。

模擬店は内模擬、外模擬が開かれました。内模擬、外模擬ともに当初は出店を希望する団体が少なく、どうになってしまうのか不安になった時もありましたが多くの団体に参加していただきました。また、外模擬ではリサイクル容器での販売をお願いしました。この流れは来年にも続けていってほしいと思います。

スポーツ大会では駅伝大会、テニス大会、バドミントン大会、バレー大会が行なわれ、こちらもなかなか好評でした。

以上の内容を作り上げるために私たち黎明祭実行委員会は約4ヶ月間活動してきました。そして、黎明祭が終わり充実感を得ることができました。しかし、その一方で多くの苦悩や開催にたどり着くまでの難しさも感じました。

ここからは私が思うそれらの点について述べていきたいと思います。まず、一点目が開学記念と新入生歓迎という趣旨に黎明祭の内容が合っているのかという点です。二点目が黎明祭実行委員会は校友会をもとに構成されているため、黎明祭を作り上げるノウハウが下の世代に繋がりづらいということも言えます。そして最後が、学生が黎明祭をやりたいと思っているのかどうかという点です。この点は特に疑問に思います。黎明祭は学生の希望によって、学生が主体となり行なわれているものです。しかし、先ほど述べたように模擬店の出店希望団体数は当初大変少ないものでした。また、私自身、実行委員長を希望したわけではありません。そもそも今年度まで黎明祭に来たことはありませんでした。私だけでなく、今年実行委員を自ら希望した委員はほとんどいませんでした。それでは、私を含めどのように実行委員が決められたかということ、じゃんけんです。そんな経緯もあったために、中には委員になったにも関わらず、黎明祭にかかわらずに黎明祭を終えてしまった実行委員もいました。

黎明祭では多くのお金が使われています。そしてそのお金を出しているのは学生です。以上のことを踏まえると、一度学生の意見を聞き、黎明祭は必要なのかどうかははっきりさせるべきだと思います。

とはいえ、今年度の黎明祭では多くの団体、個人からご協力頂きました。この場を借りて感謝したいと思います。

- ▼145号 <特集：新潟大学とは何だ！>
- ▼146号 <特集：新潟大学を探访する>
- ▼147号 <特集：卒業、退官>
- ▼148号 <特集：ひとりぐらしをデザインする>

バックナンバーが欲しい方は、事務局の学生部学生課まで受け取りに来て下さい。新大広報のバックナンバーは、<http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/>でも見ることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

学生編集委員 編集後記

就職活動をしていると、急にいろんな人の人生が気になります。両親・ゼミの先生・バイト先の上司・はたまた満員電車で揺られる中年サラリーマンに至るまで。皆それぞれにいろんなことを考え、行動し、そして今がある。私は今まで何人の人と出会っただろう？どれだけ話を聞いただけだろう？何冊本を読んだらう？その気になれば、なんだってできるのが大学生活。ある先生との雑談から人生観が変わってしまった、なんてこともあるかもしれない。ある本を読んで世界中を旅せずにはいられなくなった、なんてこともあるかもしれない。自分の目で見て、耳で聞いて、頭で考える時間と材料が、ここにはたくさん揃っていた。新潟大学が、みなさんにとって最高の“出会いの場”になることを願っています。

●村越啓子(法学部4年)

今回卒業生からのメッセージの部分を担当しました。編集を終えて、改めて学生時代は興味のあることにチャレンジするなど、いろいろな体験をすることが大切だと感じました。これから入学してくる高校生や1年生には、やりたいことや興味のあることに対して、勇気を出して一歩踏み出してほしいと思います。そうすると、世界はとても広がっていきます。私も残り半年の学生生活ですが、学生パワーで最後まで走り続けたいと思います。

●小見まいこ(教育人間科学部4年)

自分で投稿した記事や写真が
どのようにしてできるか。新大広報の編集
会議に参加して、新大広報の制作に参加しませんか。

■問い合わせ先：学生課(262-7330)

または各学部の広報委員まで。

編集後記



平成15年度の新大広報編集委員会による、最初のキャンパス・フォーラム(149号)をお届けします。面白く、分かり易く、役に立つ<広報誌>を目指して、今回は新潟大学の「国際性と地域性」を取り上げてみました。また、社会に出て活躍する卒業生の現在も取材しています。世界と結ぶ大学・地域と結ぶ大学・社会と結ぶ大学の姿、その一端を「観て」いただければ嬉しく思います。今年度の編集委員も強者揃いです。自在な発想と迅速な行動力を駆使して、魅力的な誌面づくりをしていきたいと考えておりますので、ご要望・ご修正などお待ちしております。

(編集委員長 石坂妙子)



新潟大学に勤務して10年以上経ちましたが、これほどすばらしい人材が活躍しておられることにあらためて驚きました。バブル崩壊以後、学生の就職が一段と厳しくなっています。そうしたなかでも、多くの卒業生が社会の各方面で中堅として活躍している姿をお伝えしたいと思いました。

(編集委員 谷喬夫)



初めてのインタビューでしたので、勝手がわからず非常に緊張しましたが、無事今回のキャンパスフォーラムに間に合わせることができました。特にオープン・キャンパスで手にする高校生や、まだ大学に入りたての新入生がキャンパス・フォーラムを手にする事で、新潟大学の先生の研究領域や様々な場で活躍されている卒業生の姿に関心を抱いていただければと思います。

(編集委員 濱田弘潤)



インタビューを3本担当した。ウイタカ先生とのインタビューテープの翻訳は、読みやすい日本語にするために、手伝ってもらった大学院生とともに悪戦苦闘した。お二人の卒業生へのインタビューは、一人は直接、一人は電話で、どちらも快く応じていただいた。こちらは、(株)博進堂の編集スタッフによるテープおこしと巧みな構成で、読みやすくしていただいた。感謝。

(編集委員 紙谷智彦)

広報委員会第1部会

● 部会長	五十嵐 由利子(学長特別補佐)	Tel 262-7165	igarasiy@ed.
● 編集委員長	石坂 妙子(教育人間科学部)	Tel 262-7116	ishizaka@ed.
● 委員	井山 弘幸(人文学部)	Tel 262-6573	hrykiym@human.ge.
	谷 喬夫(法学部)	Tel 262-6493	tani@jura.
	濱田 弘潤(経済学部)	Tel 262-6538	khamada@econ.
	大矢 進(理学部)	Tel 262-6142	ohya@np.gs
	牛木 辰男(医学部医学科)	Tel 227-2058	t-ushiki@med.
	川瀬 知之(歯学部)	Tel 227-2927	kawase@dent.
	山口 芳雄(工学部)	Tel 262-6752	yamaguch@ie.
	紙谷 智彦(農学部)	Tel 262-6625	crenata@agr.

●事務局(学生部) Tel 262-7330 Fax 262-7515 gakusei@adm.
(E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの表記を省略しています。)

●新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

●新潟大学学生部ホームページ <http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp>

この広報は再生紙を使用しています。